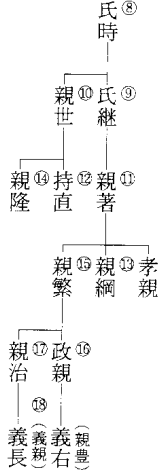


ちは変わりません。大内盛見が戦死するに至ったのは、無理をしたため、私の造意によるものではありません。筑前国の内、大友家が代々知行してきた所々を知行するだけでよいのです」と弁明させた。この結果、幕府は大友持直の本知行国は元のごとく承認し、大内氏も、豊前・筑前を従来通りとした。

七 大内持世と大友持直の対立

永享三年（一四三一）六月、大内盛見の戦死によって、筑前は少弐氏が、豊前は太友持直が領することになったのをみて、公方義教は菊池氏に筑後国守護職を与えて、大友持直を討たせようとした。これより以前、幕府は大友持直へ筑後半国を与え、前の守護菊池氏が去り渡さないため、一國全部を大友持直へ与えたから、大友・菊池両氏の交戦がつづいていたのである。また、大友持直と対立し、交戦をつづけ、肥後の菊池氏に匿かくわれていた大友左京亮親綱、同様に山に楯籠たてかごっていた大友親隆兩人に、安芸・石見の国人を加勢させて、持直を討伐させようとした。

大友氏略系図



大内盛見の跡目については、大内家雑掌内藤肥後入道智得が三宝院満濟に語ったことによると、周防国は新介持盛へ、長門国は刑部少輔持世へ、長門国一郡を中務大輔満世へ分配することを公方義教に承認してほしいと盛見が申し入れていたという。内藤智得は、新しく、長門・豊

前・筑前を持世へ、周防と安芸東西条を持盛へ、長門一郡と石見国二万郡を満世へ与えてほしいと申し入れ、公方義教の了解を得た。永享三年十月、公方義教は内藤智得の申し入れとは逆の決定を下した。すなわち、持世を惣領として、盛見の遺領を継がせ、弟持盛には長門国その他を与えた。

大内家の内紛

大内持世は早速筑前へ渡り、大友持直と合戦を始め、豊前でも、規矩郡に楯籠る大友持直の舎弟掃部助親雄および一族の挟間氏と対峙した。

永享四年（一四三二）二月、盛見戦死のころ、企救郡朽綱に在陣していた新介持盛は、幕府裁定に憤懣ふんぜんやるかたなく、長門へ渡って持世方へ夜襲をかけた。持世はいったん長門の奥へ遁れ、さらに近くの石見国三隅城に籠城した。持盛は大友持直の支援を得て、豊前国を支配下に置き、周防国へ帰って、惣領の座についた。京都では、「遠国の事は、少々の事は上意の如くならずとも、よい程にゆるすことは、当御代あみよばかりではなく、尊氏のころからの政策であると伝承してきている」と、持盛の惣領を承認する動きが出てきた。ところが、持世はまもなく石見・安芸の軍勢を率いて山口に突入し、持盛を豊前へ奔らせた。持世は幕府が与えた持盛の領地を給うよう申請し、長門国と安芸東西条以下を得た。豊前へ通れた持盛は、大友持直の応援を得て、防長への侵入の機会を窺うかがい、防長の国人への工作をすすめた。

豊前守護大内持世

京都では、大友親綱・同親隆と日田・佐伯・田原の幕府小番衆に命じて、大友持直・大内持盛を討たせようとした。また、安芸の毛利小法師・小早川弘景等をも、大内持世に合力させた。半年後、幕府は停止していた九州渡海を大内持世に許可し、安芸・石見・伊予三か国の武士に合力させ、また菊池持朝へ

筑後国守護職を与え、大友親綱に豊後国守護職を与えて大内持世に合力させた。

永享五年四月、大内持盛が豊前篠崎（小倉北区）で討伐され、持盛の代官大内満世も出家して伊勢参宮の途中、京都に宿泊していたのを発見され、斬首された。八月十六日、少弐満貞の楯籠る香春二の岳城が、大内持世を支援する備後・安芸・石見・周防勢によって攻められて数百人が討ち取られ、ついで同月十九日攻略され、大友持直の舎弟親雄の楯籠る秋月城も、備後守護代犬橋某らによって陥落し、少弐満貞父子三人が戦死し、その首が京都で梟された。劣勢となった大友持直は豊後府中（大分市）より船出し、行方をくらませた。

鞍持合戦

永享六年九月、大内持世は鞍持で大友持直・少弐嘉頼と戦い、筑後方面へ没落させた（『小早川文書』）。
今月六日、鞍持合戦の事、大内修理大夫注進し訖ぬ、石垣図書助討取らると云々、尤ももつて神妙なり、いよいよ戦功を拙せらるべきの由、仰せ下さる所なり、よつて執達件の如し

永享六年九月廿六日
小早川又太郎殿

（細川持之
右京大夫（花押）

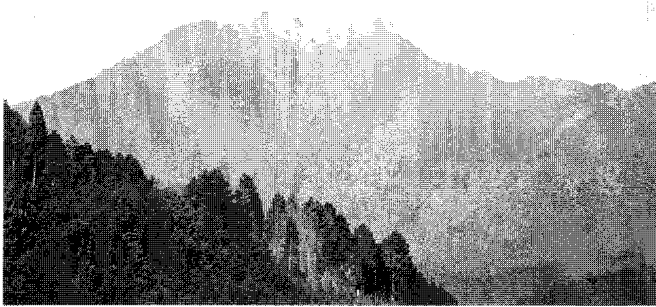


大友持直の花押

鞍持の地名は、糸島郡にもあり、この合戦が筑前で行われたとする説もあるが、豊前蔵持山の合戦と考えた方が説得力をもつ。

修験道の蔵持山

『太宰管内志』の蔵持権現社の項に「講堂より……北山にゆく処、五輪ノ塔多くあり、此奥には弥多しと云」とあり、この合戦に関係のある墓かもしれない。



伊良原方面より見た蔵持山

同書には、講堂の向かい一〇〇坪ほどのところにある北山殿に、宝徳四年（一四五二）、修験者智乗が鰐口（大きな平たい鈴）を寄進したものが、上座郡岩屋権現にあると記す。蔵持が中世において信仰の山であったことを物語る唯一の確実な史料である。

寛政のころ（一七八九―一八〇一）の書物『豊鐘善鳴録』を参考にすると、蔵持山を開いたのは、天慶の初めごろ（九三八―九四七）死んだ僧静暹だという。静暹は出自不明で、天台密教を定慧・兼熟から学び、空鉢窟で修行し、やがて豊前の多くの人々の帰依をえて堂宇を建立し、全盛時には、九六もの寺坊があったという。

中世末であろうか、一八坊となり、そのうち城台坊・真蔵坊・宝泉坊・梅本坊・中之坊を宇都宮氏五坊といい、城台坊が法頭を務めたという。宇都宮氏の神楽城の出城となったのであろう。豊後の六郷山執行職を田原一族の吉弘氏が手に入れて、屋山に居城した例に似ている。

江戸時代には六坊となって、彦山六峰の一つに位置付けられた。

豊後姫岳合戦

永享七年（二四三五）七月、大内持世は安芸・石見・坊長・伊予の軍勢と共に、大友持直が楯籠る豊後姫岳（臼杵・津久見市境、高さ六二〇尺）を包囲し、深追いしすぎて伊予の守護河野通久を失う大敗を喫した。同七年末から翌年六月にかけて、再度の包囲と調略でやっと姫岳を落城させ、大友持直を決定的に没落させた。

嘉吉元年（一四四一）六月、京都では、結城合戦戦勝の宴が赤松満祐の邸で開かれ、宴たけなわのところ、公方義教が斬殺されるといふ事件が起こった。この時、公方に陪席していた大内持世は築地を乗り越えてその場を脱出したが、重傷を負い、翌月、傷口が悪化して落命した。公方義教は、自分にすり寄り寄る武士を重用して現地との繋りの強い武士を疎外することになり、かえって事態を混乱させることが多く、幕府権威を失墜させる結果をもたらした。

八 応仁の乱と大内政弘

大内政弘の上洛

大内持世が非業の死を遂げたあと、盛見の子の教弘が家督を嗣いだだが、寛正四年（一四六三）、伊予国の守護河野通春と管領細川勝元との合戦に、縁家にあたる通春を応援するため、同六年伊予に出陣して、船中で病に倒れ、興居島に卒した。それから間もない応仁元年（一四六七）一月、応仁の大乱が勃発した。大内教弘の子政弘は山名宗全に招かれて東上を決意し、八月、二万以上の大兵を率いて西陣に入り、山名方の劣勢を逆転させた。文明元年（一四六九）、細川勝元は、山名・大内の分国を攪乱して、京都での大内政

弘の足をすくおうとした。すなわち、前の筑前守護代であった伯父大内掃部頭教幸（入道道頼）を誘い、仁保加賀守盛安と共に、長門赤間関に挙兵させ、豊後の大友親繁に豊前国守護職を与え、筑前国守護職を対馬に亡命していた少武教頼に与えた。

大友親繁の

四月十日、豊後府中を出発した大友親繁は大内分国の豊前支配 主力が上洛した空白を突いて豊前に侵入し、宇佐郡糸口原に布陣した城井秀房・長野行種らを破って、城井秀房を戦死させ、一か月ばかりで豊前半国を支配下に置き、五月中にことごとく平定した（『野辺』）。つづいて筑前・肥前に打ち入り、少武・千葉氏と共に探題館を攻略した。

大内 教幸

文明元年十二月、大内道頼と仁保盛安は、周防鞍掛山馬岳で自害 で、留守を預かる陶弘護と戦って敗れ、安芸に移り、

さらに石見の吉見信頼の支援を得て、長門へ入り、阿武郡で、陶弘護・益田貞兼と戦って敗れ、豊前へ遁れた。文明二年正月二十五日、馬岳において、道頼は子の加嘉丸と共に自殺した（『大内氏』）。『坊長風土注進案』は、文明元年九月二十四日、謀反により、馬岳において自刃したとし、

『歴代鎮西志』は陶・益田・紀井・長野の大軍に包囲され、文明元年十二月、数回防戦したが、仁保加賀守盛安（弘直とある）が戦死し、道頼も妻子を殺したあと自殺したと記している。しかし、このころ、豊前は大夫親繁によって占領されており、道頼も親繁も東軍方として行動していることを考えれば、矛盾していることに気付く。

奈良興福寺の『大乘院寺社雑事記』の次の記事は、大内道頼の自刃について、従来の諸説に疑問を投げかける。

（大内）
当家の事、忠節を致すべき由、仰せ下され候、管領様の御書頂戴申され候、道頼の事は、年籠り寄り候、嘉々丸の事、自今以後、奉公を致さしむべ